

『若手の会シンポジウム：ウィズコロナ時代のマリンバイオテクノロジー研究 ～志定まれば、気盛んなり～』

前田義昌（筑波大学）・新家弘也（関東学院大学）

新型コロナウイルス感染症が発生して以来、大学・研究機関・企業の研究活動、学生に対する教育活動に対する大きな制約が生まれ、漠然とした不安が取り巻いている。その一方で、ウェブ会議システムや IoT 機器など新しいシステムが利用可能になり、以前よりも効率的に研究活動を行うことが可能となった側面もある。そこで、これから研究活動に取り組む次世代に、どのような状況になっても適応できる研究者の底力やピンチをチャンスに変えて挑戦する志を示せたらと思い本シンポジウムを企画した。

早朝からのセッションにも関わらず 35 名にご参加頂き、3 名の講演者に最新のご研究を発表していただいた。特に、コロナ禍で活動を制限されて一番困った事とその解決方法、もし将来的に同様の事態が起こることを想定して備えるとしたら今から何をするか？ コロナ禍でも活動を継続するために研究者間で共有したいコツ・工夫・技術・心構え、などの項目を含めた講演をしていただいた。1 人目の澤山英太郎先生（日本大学）には、これまで集団遺伝解析に用いられてきたマイクロサテライト DNA マーカーに替わる、より正確かつ多種多様な集団遺伝解析を行うことのできる SNP パネルの開発についてお話をいただいた。その際、人的ネットワークを生かしたサンプルの新たな入手経路の開拓など、コロナ禍での興味深い工夫についてもお話いただいた。2 人目の小祝敬一郎先生（東京海洋大学）には、Drop-seq 法を用いた研究者の数や情報が不足している非モデル生物研究の開拓について、クルマエビでの新規実験系の立ち上げとその有用性についてお話をいただいた。情報が少ないことから敬遠されがちである非モデル生物が扱えるようになれば、様々な生物種を扱うマリンバイオテクノロジー分野での発展に大きな期待を感じた。最後に、西川洋平先生（早稲田大学）から駿河湾やサンゴ共生細菌で行った 1 細胞ゲノム解析の実例を基に、その汎用性や有用性についてお話をいただいた。特に、1 細胞ゲノム解析のデータクオリティを担保するため、サンプル調製を素早く行うことやサンプルの保存が重要であるというお話が興味深かった。

質疑応答や総合討論では、研究やコロナ禍での工夫・モチベーション維持について活発な意見交換ができ、普段の研究発表では聞けない研究のコツや研究者の底力を感じることができたのではないだろうか。